

近代的二元論批判・序説

伊 藤 一 美

1

『梅本主体性論の検討』⁽¹⁾と名づけた拙稿において、私は梅本が提起した歴史と a priori な個人との一体化という問題は、それ自体近代理性の地平にのつかった論議であり、それを解決するには近代理性を克服する方向でしか解決しえないと、のべた。

近代理性は精神と物体とをそれぞれ実体 Substanz としている。精神は主観(体)概念へと純化されつつ自己発展し、近代的人間観をつくった。しかし、それは私的な個人としての主観であり、ヘーゲルの「精神」なる概念によって「社会的」な主観という内容をもつものとなったのであった。しかし、人間は主観や意識、つまり一つの抽象体ではない。

物体は主観にとっての対象であり、客観となっている。それは主観にとつての認識(働きかけの)対象なのであるが、それ自体、法則性をもって自己展開する客体(対象)とされている。この対象を「純粹モデル」設定でもって数量的に把握するのだが、ここに科学の絶対

性Ⅱ中立性なる論議が発生する。けだし、それは客体の反映だからである、と説明される。だが、それは客体の反映などではない。というのは「純粹モデル」設定自体、対象の部分的きりとりであり、「モデル」と対象とは切断されている。「モデル」は死した断片ではない。したがって、近代理性においては物体は死した客体として取り扱われており、その上に近代科学は成り立っている。

こうした二実体論からは、主観(体)主義と客観(体)主義、人間主義と科学主義という学問上の分岐とぶれが常に再生産されてきた。疎外論と「後期マルクス」との区分、歴史(Ⅱ必然)と a priori な個人との二律背反のごとき論も生じてきたのである。

このような問題性を克服していくためには二実体を相対化し、関係概念化し、人間Ⅱ主体の世界内化と物体Ⅱ客体の人間主義化とをなし、そうすることによって具体化することである。しかも、このことを二元論の再生産構造を説明するという方向でなすことである。本稿は後者に力点をおいたスケッチである。

2

こうした二元論超克に関して、多くの示唆に富む論を展開しているのが、物象化論である。なかでも真木悠介著『現代社会の存立構造』⁽²⁾は氏の考え方をスケッチとはいえ体系的にのべているように思う。と同時に、いわゆる物象化論の問題点をも顕現しているようにも思う。

真木氏は、社会の存立構造論の地平において、二元論の構図をも位置づける。氏によれば社会の存立形態には——、1 即目的な共同体 *Gemeinschaft* 2 集合態 *Gesellschaft* 3 対目的な共同態 *Kommun*

の三形態があり、近代—現代社会は、集合態である。ここでの人間は反省的な意識の主体としての諸個人であるが、「私」的にのみ、主体的である。というのは、「みずからの生の物質的精神的な内実を決定している社会的連関の総体性を……対目的に統御することは出来」⁽³⁾ないからである。したがって、社会というものは「それぞれが私的な主体性、目的性をもって実存し行動する人間たちの相互に外的な諸実践の総体連関が、結果として成立せしめる対象的『客観的な諸「法則」』の構造として媒介的、即目的に存立している」⁽⁴⁾。だから、諸個人にとっ

ては、その存立構造がただちにはみえない、不透明な社会である。しかし、そこに生きている諸個人の日常的意識にとっては、なんら不透明ではない。人々は、社会や経済の動向を予測して利益をあげたり、損失を回避したりする。それは、自明性の社会である。だが、この自

明性とは対象的な『客観的な、物的な事象としての自明性なのである。

これに対して、第二の自明性が存在する。それは、社会とは「自分たちの人間じしんの行為の連関以外の何ものでもない……」⁽⁵⁾という自明性である。

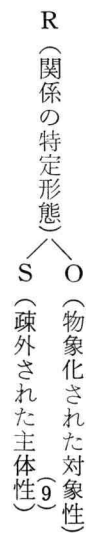
だが、この第二の自明性は、さきの社会が対象的・客観的なものであり、物的な事象であるという第一の自明性と二律背反におちいる。ここから、近代の思想史などを貫通する社会名目論と社会实在論、原子論と有機体論、実存主義と構造主義、主体性主義と客観性主義、等々の交互定立が生れた。これが二元論の現象である。

こうした二元論の枠組のなかにあるものの一つが近代社会諸科学である。たとえば、この科学の主流をなしてきた実証主義的、数量主義的、行動主義的、操作主義的な諸科学は対象的、客観的に存立する社会諸形象——商品、貨幣、資本、利子率、国家、法等々——と、その運動を対象的・客観的な法則として把握してきただけである。だから、私的である主体の生は「文学」・「実存」等の主題として、体系から疎外されてきた。これらの科学とは、分析理性的な諸科学にすぎず、「近代社会の自己意識」である。したがって、それは批判的な眼をもっていない。すなわち、かの客観的法則や「実存」の存立根拠を対自化出来ない。それゆえに、この現実の総体を根底的に揚棄する論理たりえない。

これに対して、弁証法的理性が存在する。それは「物質的な諸形象、諸法則をその生成の論理において解明し把握する」。「それは、すなわち対象的＝客観的に存立する社会的な諸形態、諸法則を、それら相互の函数的＝機能的な関連を表示する公式やシステムとして外的に認識することに満足するのではなく、……弁証法的理性は *Versachlichung* (事物・のようにならること＝「物象化」) の過程をまず問題として主題化すること、すなわち *Sache* たる社会諸形象、諸法則の存立の根拠そのものをまず問うことをみずからに課する」⁽⁷⁾。それは「われわれ自身の主体的実践とその相互関係が、なぜ、いかにしてこれらの諸形象・諸法則を存立せしめるにいたるのか……をその生成の論理において流動化して把握しなおそうとする意志である」⁽⁷⁾。

氏によれば、この弁証法的理性の方法を貫徹しようとして苦闘した先駆が、後期のマルクスであった。「後期マルクスの苦闘は……人間実践相互の自然生的な関係や過程の諸相が、なぜ、いかにして、どのような具体的過程をとおして、つぎつぎとその物的な性格のポテンツを高次化してゆく「社会的諸対象」へと凝固し、軋形し骨化してゆくか、この物象化の機制的な解明にこそあった」⁽⁸⁾。マルクスが、こうした視座にたつにいたったのは『ドイツ・イデオロギー』以後であった、と氏はいう。すなわち、『ドイツ・イデオロギー』においては、『社会的活動の固定化、われわれの手におえず、われわれの期待を裏切り、われわれ以上のなにか物的な力への、われわれ自身の産物

のこの凝固化」が、「自然生的な分業の体系」の帰結として把握されている⁽⁹⁾。「自然生的な分業の体系」が先在し、それによって諸個人の社会的活動が物化されるのだ、という。こうして、氏は次の図式をかかげる。



Rとは「自然生的な分業の体系、すなわち諸個人の即目的かつ媒介的な協働連関、という歴史的な形態である」⁽⁹⁾。こうした「自然生的な分業の展開という諸個人間の現実的な関係性の様態がまず歴史的に成立し、このような関係性の様態の必然的な、かつ双対的な帰結として、主体の対象化および対象の主体化、すなわち「疎外」と「物象化」とが存立するという歴史的＝現実的な把握が獲得されている」⁽¹⁰⁾。つまり、氏は関係性の存在が第一であることを主張している。主体の〈自己疎外〉が、まず先在するのではない、という。しかし、氏がこう語るとき、私的な諸個人は、ただ結果として疎外をこおむるだけとなり、結果としての存在でしかなくなり、出発点においてはそうではないことになる。これが、ここでの疎外、人間規定の意味内容である。だが、それでは存在の了解だけがのべられているだけとなる。なぜそうなのか。それは、氏が諸個人を結果においてだけみて、出発点においても諸個人をみていないからであり、関係性のなかにおいて、関係性そのものとして具体的に諸個人をみていないからである。つまり、人間規

定が不確かなのである。あるいは、それが一般的・抽象的なのである。

氏は、こうした批判をみこして個人と社会との関係を論じて答えている。すなわち、上述のように、諸個人の「主体性」が見失われてしまふというような批判は、あらかじめ「社会」を諸個人から外在する物象として観念すること起因している、という。そして、こういうマルクスも個人は「社会」によって決定されてしまふ、とは主張していないし、逆に「環境」も人間によって変えられる、とのべている。また、サルトルは必然性とは私が自由でないからではなく、他人もまた自由だからである、といっている、と。こうして氏はいう、『たぐさんの「私」たちの相互作用の総体として、それ（歴史）はおりなされてゆく。社会とは、その実相は、私、あなた、彼、そういった無数の人びとの実践的な相互関係の総体である。……歴史の主体＝実体は「個人」でも「社会」でもなく、「つながりあい諸個人」の「相互にくり合う」関係そのものである』⁽¹¹⁾。このように、氏は「疎外論」に対しては協働関係の先在を主張し、それが主体性をそこなうという批判にたいしては、社会は諸個人の関係そのものだという。諸個人と関係性とは結びあって把握されていない。「諸個人」が一般的・抽象的である。それは、諸個人を、すでにその時点において関係そのものとしてとらえていないからである。だから、その関係性が問題だということになる。すなわち、関係性とは何か、という問題である。こうした関係性と人間規定との不確さは、氏の物象化論の展開とともに明らかに

なり、また物象化論の問題性をも形成している。

まず、真木氏は物神化について語る。近代市民社会においては諸個人の協働が、彼らの統一された力としては現われないで、彼らにとつて疎遠な外在する強制力として現われる。何故にか。それは、協働＝人間の共同性が近代社会においては「媒介された共同性」として現われるからである。というのは、近代社会においては「諸個人の主観の個性が、事物とか人物とか言語的観念によって相互に媒介されつつ、媒介された共同性を対象的＝客観的に存立せしめる」⁽¹²⁾からである。氏は、このように、「媒介」に物神化の根拠をみる。こうした「媒介」のために「諸個人の実践的相互連関のうみだす力」、「社会的諸関係の総体」の固有の力は、これをおのおのの個人のがわからみると、媒介たる事物や人物や言語的観念自体に内在する力のようにみえる」⁽¹²⁾ことになる。たとえば、貨幣は諸商品相互の関係を媒介する。そうすることで、それは商品の価値尺度として、意味づける主体としてたちあらわれる。『すなわち、貨幣は……「取りもち役」であることによつて、逆に商品社会の王となり「目に見える神」とまでなる』⁽¹²⁾。

このように、近代市民社会においては諸個人が個性性としてあるから、それらを媒介する媒介自体が、媒介された共同性の固有の力を自己の属性として身におびる、ここに成立するのが物象である。したがって、氏は物神を媒介された共同性の力能という意味で使い、媒介体がその媒介された共同性の力能を體現したとき、それを物象といっ

ているように思われる。物神化を媒介から説いている。だが、物神が媒介から生ずるということでのいのだろうか。たとえば貨幣はどのようにして生じたのだろうか。貨幣が媒介だという前に、どうして貨幣が媒介として生じたかが問題であるように思う。貨幣は商品関係から生じたのである。ここでは、氏は論立にあたって関係から始めている。やはり、いかなる関係かがぼけている。そして、人間も「諸個人」ではない。

ところで、氏は物神化、あるいは物象化の原論理を「上向的次元累進」的に、あるいは「重層的構成」的に展開する。「われわれは現代社会の物象化的存在構造を、次のような基本的な諸論理水準の重層的な構成としてとらえることができる」⁽¹³⁾。この構成の第一の原理は、商品関係（商品—貨幣）である。第二は、資本—賃労働であり、第三は資本による技術的合理化過程の貫徹であり、第四は資本家自体も法則性に支配され、無力な客体として存在するにいたる、ということである。現代社会は、こうした四重の構成としてとらえられるべきだ、というのが氏の論である。ここで、氏の論の問題性を露呈せしめているのが、第一と第二との区別と関連の問題である。この点において、先述の問題点が解明されてくる。

第一について氏はいう。『……この商品関係こそは「自然生的な分業体系」、すなわち即自的・媒介的協働関連、いいかえれば集合態（近代市民社会）の生産関係における規定が論理必然的に、かつ直接的に

近代的二元論批判・序説（伊藤一美）

存立せしめる関係に他ならない」⁽¹⁴⁾。『資本論』の結論部分で、マルクスは資本主義的生産様式を特色づけているものとして二つの点をあげている。その一つは、生産物を商品として生産することであり、そして二つは「生産の直接的目的および規定的動機として剰余価値の生産」であるが、このことは商品関係と資本関係とはその構造を異にすることだし、前者を前提とすべきだ、と真木氏はいう。こうして、氏は商品—貨幣関係と資本—賃労働関係を区分し、重層的に、両者を把握すべきだ、とする。『……資本—賃労働関係は、論理的にも歴史的にも商品関係の発展を前提することなしには存在しえない』⁽¹⁵⁾という。こうして、商品—貨幣関係のなかに、その展開のなかに資本—賃労働関係を位置づける。だから、「商品物神の秘密は即自的・媒介的協働関連における水平的集列関係に求められるべきものであるのにたいし、資本物神の秘密は剰余労働の収奪に、すなわち垂直的な階級関係に求められるべきものである」⁽¹⁶⁾となる。この結果、『資本論』第一篇第一章は単純商品の論述、単なる貨幣生成史の論述となる。したがって、さきにもべた関係性と人間規定の不確かさ、一般化と、こうした重層的把握とは連動しているわけである。すなわち、商品—貨幣でみれば関係性は商品交換関係で、人間とは「私的所有者」—私的個人—小商品生産者となるが、資本—賃労働でみれば関係性は資本制生産諸関係となり、人間とは資本家、賃労働者等となる。それぞれの層において、具体的に関係性も人間存在もことなるのである。それを商品—貨

幣で一体化しようとするところから、かの問題性が生じるのである。したがって、さきにのべた「不確さ」、問題性は、原理を商品―貨幣とするとところから生じているのだ。商品―貨幣で資本―賃労働を語ろうとする点にある。だから、氏が「主体生成の現実的契機」といっても、いかなる主体なのか不明確なのである。ここに、真木氏の、といわなくてもいいゆる物象化論の問題性があるように思う。同時に、それは『資本論』第一篇第一章の理解の問題をも提起しているのである。

3

(1)

『資本論』⁽¹⁾については、特に第一篇第一章に関してはあらゆる部分について古くから論争がなされているが、そうした論争をあえて前面化せずに、論述を試みたい。

第一篇第一章冒頭は、次の文章で始まっている。「資本家的な生産の仕方が支配的である諸社会の富は一つの『膨大な商品集合体』として、個々の商品にかかる富の要素的形態として、現われる。だから、我々の研究は商品の分析をもって始まる。」⁽²⁾ここで、マルクスは当面の研究対象が資本家的社会における商品であること、つまり資本制商品であることを確言している。すなわち、『膨大な商品集合体』は「個々の商品」からなり、しかもそれらが「現われる」のだから現在のなことであり、資本家社会という現実における問題設定である。冒頭商

品は資本制商品である。

商品はまず人間のある種の欲望を満足させる物であり、有用物である。この有用性が資本家社会では、商品の使用価値となる。「人間の生活に対する或る物の有用性は、その物を使用価値たらしめる」⁽³⁾。この使用価値は、資本家社会においては交換価値の担い手、あづかり主である。「我々が考察せんとする社会形態においては、それは同時に交換価値の物的な担い手をなす」⁽³⁾。だから、交換価値は自然物に初めからそなわったものではなく、資本家社会において自然物に負わされたものである。

この「交換価値は、先づある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換されるところの量的関係、すなわち比率……として現われる」⁽⁴⁾。しかし、使用価値として、それぞれにことなるものが比率として現われるからには一つの同一なものに還元されていることになる。すなわち、二商品の交換関係においては「……両者はそれ自体は前者でも後者でもないところの、ある第三者に等しい。……両者の各々は、それが交換価値たるかぎりには、他方のものから独立に、この第三者に還元されなければならない」⁽⁵⁾。「諸商品の諸交換価値も、それらがこれの多くを、あるいは僅かを表示するところの一つの共通物に還元さるべきである」⁽⁵⁾。そして、量の多少比率は、この「一つの同一なるもの」の現象となる。「だから、第一に——同じ商品の妥当な諸交換価値は、一の同等なものを表現する。ところで、第二に——交換価値は総じて

ただ、それとは区別されうる或る内実の表現様式たり『現象形態』たりうるのである⁽⁶⁾。この「一つの共通物」、これが交換価値の実体である。だから、「交換価値の実体は、商品の物理的な、すなわち手で握みうる存在、あるいは使用価値としての商品の存在とは全く異なるものであり、且つ独立したものである……」⁽⁵⁾。これが、価値である。だから、価値は自然的なものではない。それは、資本家社会における諸商品の交換関係という一つの社会的関係から抽出されたものである。「使用対象、あるいは財としては、諸商品は物理的に相異なる物である」⁽⁷⁾。しかし、価値としてみれば財は一つのものとなる。「それらの価値有は……それらの統一を形成する。この統一が生れるのは自然からではなくして、社会からである」⁽⁷⁾。だから、価値とは社会的、関係的概念である。「……価値としての諸使用対象の規定は、言語と同じように……社会的産物である」⁽⁸⁾。だが、この社会的（関係）とは資本制社会関係のことである。資本制商品は、使用価値と価値なる二つの、二者闘争的属性をもつ。資本制商品は、そういう矛盾的自己同一性である。

だが、諸物はなぜ価値となりうるのか。諸商品の交換関係から、それは抽出されたといっても、そうなる原因なくしては、価値は抽出せられない。諸物にそうなる内在的原因があるはずである。だから、価値が抽出せられる、というより現象するというのが正しい。なぜか。「種々の使用価値においてのみ種々に顯われるところの、その共通な

社会的実体は——労働なるものである」⁽⁷⁾。すなわち、「価値としては、諸商品は結晶した労働以外の何物でもない」⁽⁹⁾。「諸商品の使用価値を度外視すれば、それらになお残るものは、一つの属性、すなわち労働諸生産物だという属性だけである」⁽¹⁰⁾。

しかし、労働といっても、具体的にはすべて異なる。指物労働であり、建築労働であり、紡績労働である。それを、価値としては「結晶した労働以外の何物でもない」⁽⁹⁾といい、諸商品が価値として区別なきものとなっていることは、労働の具体的な区別を捨象し、一つのものに還元していることになる。これが、すなわち「抽象的・人間的労働」である。「……労働の相異なる具体的諸形態も消失して、それらはもはや互に区別がなくなり、すべてのこらず同様な人間的労働、すなわち抽象的・人間的労働に還元されているのである」⁽¹⁰⁾。「かくして、ある使用価値、または財がある価値をもつのは、そのうちにある抽象的・人間的労働が対象化、または物質化されているからに他ならない」⁽¹¹⁾、ということになる。こうして、抽象的、人間的労働なるものがうかがいあがってくる。だが、抽象的・人間的労働がありうるためには、その原因がなければならない。それが、抽象的・人間的労働力である。人間の自然的な労働は具体的なものではない。力としてはない。それは、活動そのものとしてあるだけだ。したがって、抽象的・人間的労働（力）なる概念も、価値と同様資本家社会的諸関係から生じる概念であり、労働の自然的属性ではない。それは、資本家社会的・関係的

概念である。

価値とは「結晶した労働」であるが、交換価値は量的比率として現われるから、その実体としての価値なるものは、量的なものでもあることになる。とすると、価値をつくっている労働そのものも、ある単位に還元され、較量されていることになる。その単位は「単純な平均労働」である。「労働そのものの計量単位は、単純な平均労働である」。(9) 複雑労働は「単純な平均労働」に換算される。だから、この「単純な平均労働」の分量によって価値の大きさは計られる。つまり、「それ(商品)に含まれた『価値を形成する実体』の労働の分量によってである」。(12) さらに、「労働そのものの分量は、その時間的継続によって計られる……」。(12) つまり、一商品の価値はその生産中に支出された労働量＝単位としての労働時間の量(単純な平均労働に換算された労働時間量)によって規定される。しかも、この「労働時間」なるものは、国および文化・時代を異にするにつれて変動・変化するが、ある一商品に関していえば、当面の社会においては一定している。というのは、「労働の生産力」(13) が社会において、やがて変化はするが、当面一定だからである。だから、「価値を形成するものとして効果をもつのは、社会的に必要な労働時間のみである」。(12) となる。つまり、同一のものをつくるにも自然的には個人によって、必要とする時間はことなるはずである。それが、資本家社会のなかでは平均化されている、ということである。だから、「社会的に必要な労働時間」なるものも、一つの抽象

であることを意味している。それが、商品交換から発生しているようにみえる。だが、そうではない。「労働の生産力」によって実体的にうらづけられているのだ。というのは、「労働の生産力」がそのように組織されているということである。一定の規準で、平均的に労働を組織している、ということである。労働過程が、そのようなものとなっていることである。かくて、単純な平均的労働に換算された「社会的に必要な労働時間」なるものが顕現してくるのである。だから、これも資本家社会的・関係的概念である。

では、「抽象的・人間的労働」と「社会的に必要な労働時間」とはいかなる関連性にあるのか。マルクスは、『経済学批判』(14) のなかで、次のようにのべている。「諸商品の(価値)をそのうちにふくまれている労働時間ではかるためには、いろいろな労働そのものが、無区別な・一様な・簡単な労働に、要するに質的には同一であり、したがってただ量的にだけ区別される労働に還元されなければならない……このように時間によってはかられる労働は、実際には、ことなった諸主体の労働としてはあらわれないで、むしろ労働する種々さまざまな個人がおなじ労働のたんなる諸器官としてあらわれるのである。いいかえれば、(価値) (15) であらわされる労働は、一般的(抽象的)・人間的労働として表現されよう」。(16) 「社会的に必要な労働時間」なるものがありうるのは抽象的・人間的労働によってである。こうして価値なるものがありうるのは、抽象的(一般的)・人間的労働なるものがあるからだ、と

いうことになる。なぜ、そのようなものがありうるのか。交換関係によってか。そう考えるのは物神性にとらわれたみかたでしかない。「抽象的・人間的労働」があるのだから、それをあらしめているものがある。それは、すでにのべたが「抽象的・人間的労働力」なるものである。「商品の価値は、人間的な労働そのものを、人間的な労働力の支出一般（抽象的・人間的労働力の支出のこと）を表示する」⁽¹⁷⁾。また、「ここに抽象的な労働というのは……労働の規定された有用な、具体的な特性が捨象されているからであり、人間的な労働というのは、労働はここでは人間的な労働力一般の支出としてのみ効果をもつからである」⁽¹⁸⁾。「抽象的・人間的労働」とは力の現われとしてあるのである。そして、力＝powerへと具体的労働が還元されることによって、「単純労働」による「社会的に必要な労働時間」への還元がなされるのである。較量がなされるのである。ここで、「抽象的・人間的労働」と「社会的に必要な労働時間」とが結びつく。しかし、こうしたことは資本家社会的なことなのである。

「抽象的・人間的労働力」なる概念は物象概念である。それは、労働の自然的属性ではない。それは、資本家社会関係の概念である。こうして、人間労働は生命活動そのものであるが、「抽象的・人間的労働」と具体的労働という二つの概念規定をうけている。こうして、商品によって現わされる労働は二者闘争的なものである、となる。資本家社会関係としての労働は矛盾的自己同一性なのである。

近代的二元論批判・序説（伊藤一美）

では、なぜかかる物象概念があるのか。抽象的・人間的労働力とは生命活動が労働力とされ商品となっていること、生命活動が商品化されて労働力という商品となっていることである。抽象的・人間的労働力とは「労働力商品」のことである。

さきにもみたが、「労働の生産力」によって「社会的に必要な労働時間」が規定されるということは、労働過程が資本の生産過程となっていることであるから、商品の分析は、資本制生産諸関係の存在につきあたったのである。商品の交換関係から発生する諸概念は発生しているのではなく、現象しているものであり、それは、生産諸関係が物化していることの現われなのである。深層、源泉の発現なのである。だが、それがあたかも交換関係から生じているようにみえる。そうすること、それは真実を隠している。諸概念＝抽象が、あたかも自然的なものであるかのように現われ出ることによって、労働過程が物化していることを隠している。すなわち、人間が物化していることを隠している。まず、人間が関係そのものとして物化しているから、諸概念が発生するのである。

(2)

このように、資本家社会的諸関係での労働は二者闘争的なもの＝矛盾的自己同一性であるから、生産関係からそう規定されているから、商品は価値と使用価値なる規定をうけとり、二者闘争的なものとなっている。「商品は価値であるためには何よりもまず、使用価値でなけ

ればならぬのと同様に、労働は「抽象的」、人間的な労働力の支出として、従ってまた「抽象的」人間的な労働そのものとして効果をもつためには、何よりもまず有用な労働——目的を規定された生産的な活動——でなければならぬ。⁽¹⁹⁾ この問題を解決するのが、価値形態である。「それら〔諸商品〕は使用対象であると同時に価値の担い手であるという二重的なものであるが故にのみ、諸商品である。だから、それらは、それらが自然的形態および価値形態という二重形態を有つかぎりにおいてのみ諸商品として現象するのであり、換言すれば諸商品の形態をもつのである」。⁽²⁰⁾ つまり、一商品として、商品は二重の属性をもつにいたっているのであるが、孤立した一商品として同時にこの二重の属性を現わすことは出来ないだから、この二重性は他の商品との関係においてのみ表現されうる。そこにおいて価値が現象するのである。価値が、そこで発生し、つくられるのではなく、現われ出るのである。「諸商品は、それらが「抽象的」人間的労働という同じ社会的単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性を有するということ、したがって、それらの価値も対象性は純粹に社会的なのであることを想起するならば、それはただ商品と商品との社会的関係においてのみ現象しうるということは、全くおのずから明らかである」。⁽²⁰⁾ そして、この現象のしくみが価値形態＝交換価値である。だから、価値形態とは商品の自己矛盾の展開そのものである。結局、この矛盾は貨幣の出現によって解決されるしかない。しかし、このことは「貨幣形態の発生

史を証明すること——つまり諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、それを最も簡単な、最も見すばらしい姿態から燦爛たる貨幣形態にまでたどること」⁽²¹⁾とマルクスによっていわれているが、その意味は、物々交換から貨幣誕生までをのべるのではなくて、貨幣形態の資本家社会関係における再生産構造をのべることなのである。なぜ現在の貨幣が存在するのかを論証することでもある。しかも、それを商品を媒介にして、資本制労働が存在するからかくなるのだという原理的なしかたで論証している。

商品は二重性を他の商品との関係でもって示すしかないから、たとえば二〇エルのリンネル一枚の上衣、という形態が考えられる。これらは、資本制商品である。マルクスもいう、「我々は、それらの生産に等一な労働時間を要するかくして等一な価値量である・二つの分量の商品をとって見よう」⁽²²⁾と。これは簡単な価値形態であるが、物々交換ではなく、価値形態のすべての秘密をもったものである。

リンネルは使用価値として世に現われる。だから「リンネルはまず、それと等一なものとしてのある他の商品・上衣に関連することによってそれ自身の価値を示す」しかない。そうできるのも、リンネルみずからが価値であるからであり、だから価値としての自己と等一なものとしての上衣に関連しうるからである。「質的にリンネルが自らを上衣に等置するのは、リンネルが等一な種類の、人間的な労働の、

すなわちそれ自身の価値、実体の、対象化として、上衣に関係することによってであり、また、リンネルが自らをX枚の上衣の代りに一枚の上衣にのみ等置するのは、リンネルが常に価値一般であるばかりではなくて規定された大きさの価値であり、しかも一枚の上衣が丁度二〇エルレのリンネルと同じだけの労働を含むからである」。⁽²⁴⁾「上衣へのかかる関連によって、リンネルは一挙数得をするわけである。それは、他の商品、を自らに価値として等置することによって、価値としての自身に関連する。それは、価値としての自分自身に関連することによって、同時に自らを使用価値としての自分自身から区別する。それは、その価値量……を上衣で表現することにより、それらの価値有に、その直接的な存在から区別された価値形態を与える。それは、かく自らをそれ自身において分化せるものとして表示することによって、自らを初めて現実に商品として——同時に価値であるところの有用物として——表示する」。⁽²³⁾リンネルの価値は他の商品にたいする関係においてのみ現われる。「だから価値は、交換価値としてのその表示によってのみ、それ自身の・使用価値から区別された・形態を受けとるのである」。⁽²⁴⁾

他方、リンネルの価値を上衣で表現することは、上衣自体に一つの新しい形態を与える。すなわち「上衣は今や、そのありのままの姿で……他の商品との直接的な交換可能性の形態を、一つの交換されうる使用価値、あるいは等価の形態を、とる」。⁽²⁴⁾だから、等価とは、一商品

が価値一般であり、他の商品のための交換価値として存在する、ということだ。

ところで、リンネルの価値は、他の商品に対する関係において現われたのだが、「価値としてのリンネルは、労働からのみ成りたち、一つの見透せるように結晶した労働膠結体を形成している。しかし、現実においては、この結晶は甚だ不透明である」。⁽²⁵⁾労働を商品体において発見しようとするかぎり、労働は抽象的・人間的労働ではなく、機械り、紡績等々である。リンネルを人間的な労働の物的な表現、すなわち価値とするには、リンネルを物たらしめている一切のものを捨象せねばならない。そうしたとき、「人間的な労働の対象性は、必然的に捨象的な対象性、一つの思惟物である。かくてリンネルは脳髓の織物となる」。⁽²⁵⁾このように、いくらリンネルを分析しても、それには抽象的・人間的労働の対象性であり、価値だとは書いてない。リンネルに、ただちに抽象的・人間的労働をみようとしても、またリンネルだけで、価値を現わそうとしてもむりなのだ。商品が思惟物となってしまうだけだ。しかし、商品は物である。物でありつつ、価値を現わすにはどうするか。「それら自身の物的関連においてその性質を示さねばならない」。「リンネルの生産においては、人間的な労働力のある規定された分量が支出されている。リンネルの価値は……支出された労働の単に対象的な反射であるが、しかしそれは、リンネルの物体においては自らを反射しない。それは、上衣に対するリンネルの価値関

係によって、自らを顕わにし、感性的な表現をえる。リンネルが価値としての上衣に自らを等置し、しかも同時にリンネルが自らを使用対象として上衣から区別することによって、上衣は、リンネル体に対立するリンネル価値の現象形態、リンネルの自然形態とは異なるリンネルの価値形態となるのである。⁽²⁵⁾ 商品に含まれる労働の二重性も、商品同志の関係において現象しうる。

いま、二〇エルレのリンネル＝一枚の上衣においては、使用価値たる上衣がリンネルの価値の現象形態となっているのだが、それはリンネルが抽象的・人間的労働の、つまり自己と等一な労働の直接的な物質化物である上衣なる物質に関連していることである。だから、上衣はリンネルに対して抽象的・人間的労働の感性的な、手に握みうる対象性として、自然的形態における価値として効果をもつ。リンネルは、価値としては上衣と本質が等しいから、自然形態たる上衣がリンネルの価値の現象形態となる。しかし、使用価値たる上衣で表示されている労働は裁縫労働という一つの規定された有用的な労働である。だから「リンネルは……裁縫労働に関連することなしには、価値、あるいは体化せる（抽象的）人間的な労働としての上衣に関連することはできぬ」⁽²⁶⁾。リンネルは裁縫労働に関連するが、それは使用価値たる上衣に関連することによってである。このとき、「この具体的労働は、抽象的・人間的労働の表現となる」⁽²⁷⁾。「具体的労働が、その対立者たる抽象的・人間的労働の現象形態となる……」⁽²⁷⁾。「だから裁縫労働がリンネル

に対して効果をもつのも、それが合目的・生産的な活動であり、有用な労働であるかぎりにおいてではなくて、ただそれが規定された労働（裁縫労働）として、（抽象的）人間的な労働一般の実現形態であり、対象化の仕方であるかぎりにおいてに過ぎぬ」⁽²⁶⁾。すなわち、裁縫労働が「抽象的すなわち人間的な労働の直接的な実現形態たるもの」となる。「……裁縫業というこの具体的な労働は、それが無区別な人間的労働の単なる表現として意義をもつことによって、他の労働すなわち亜麻布のうちに含まれている労働との同一性の形態をとる……」。具体的労働も抽象的・人間的労働としてのみありうることになる。こゝなるのは、労働が抽象的・人間的労働として存在しているからである。つまり、労働＝生命活動が労働力商品として存在しているからである。こうした結果として、このような意味において、「一つの使用価値あるいは商品体が、価値の現象形態あるいは等価となるのは、ただ、それに含まれた具体的な、有用な労働種類——抽象的すなわち人間的な労働の直接的な実現形態としての（労働種類）——にある他の商品が関連するからにすぎない」⁽²⁸⁾という。

我々はここで、価値形態の理解を妨げる困難にぶつかる。すなわち、価値形態においては使用価値は一つの新しい役割を演じる。「それ（使用価値）は、商品価値の、かくしてそれ自身の反対物の現象形態となる。それと同様に、使用価値に含まれた具体的・有用的な労働は、それ自身の反対物に、抽象的すなわち人間的な労働の単なる実現

形態となる。商品の対立的二規定は、ここでは分裂する代りに、相互に反省し合う⁽²⁹⁾。だが、これは必然的なことである。なぜか。それは、ある商品は他の商品との関係において、その商品の価値を表現する以外にその手だてがないが、そうすることで他の商品に含まれた具体的労働に関係し、かくしてこの他の商品に含まれた抽象的・人間の労働の実現形態としての具体的労働に関係しうるからである。だから、二規定は相互に反省し合う。「その商品は、それ自身に含まれた抽象的すなわち人間的な労働の単なる実現形態としての、具体的な労働に関係することはできぬが、しかし、ある他の商品種類に含まれた、かかる具体的労働には関係することができる。そのためには、その商品はただ、他の商品を自己に等価として等置することを要するだけである⁽³⁰⁾」。この等置が、内在的・質的には二規定の相互反省なのである。「一商品の使用価値は、それがかゝる仕方でも他の商品の価値の現象形態たるに役だつかぎりでは、総じてただこの他の商品のためにのみ存在する⁽³⁰⁾」。ここに、このように両商品の価値関係をその質的面から考察すれば、「人はかつ簡単な価値表現のうちに、価値形態の、従ってまた一言でいえば貨幣の秘密を見出すのである⁽³¹⁾」。

我々の分析から、一商品の相対的価値表現は、二つの価値形態を含むことを明らかにした。それは、相対的価値形態と等価形態とである。それらが、交換価値の二形態である。双方の形態は、二つの等置され

近代的二元論批判・序説（伊藤一美）

た商品に分配されている。だが、たとえば二〇エルのリンネル一枚の上衣とすれば、上衣は受動的に振舞う。それは起動者とはならない。上衣はリンネルに関連させられるがゆえに、関連を結ぶ。「だから、リンネルとの関係から上衣に生じる特性は、上衣の関連の結果として現われるのではなくて、上衣の協力を俟たずに存在するのである。そのみではない。リンネルが上衣に関連する規定された様式および仕方は……上衣を『魔術にかける』ために出来ている⁽³²⁾」。「すなわち、リンネルは（抽象的な）人間的な労働そのものの感性的に存在する物質化としての、従ってまた現存する価値体としての上衣に関連するからである。上衣が、かかるものであるのは、ただリンネルがかかる規定された仕方で上衣に関連するからであり、またそのかぎりである。上衣の等価有は、謂はばリンネルの一つの反省規定に外ならない⁽³³⁾」。なぜか。等価有は、相対的価値形態との関係において、はじめてありうる。一使用価値は、関係をうけて等価有＝等価形態となるからである。上衣が価値であっても、関係なしには等価形態・交換価値とはなりえない。上衣は、具体物としてあり、関係において、価値が現象し、交換価値となるのだ。だから、等価形態も社会的・関係的なものであり、自然的属性ではない。しかし、それが逆にみえる。上衣の属性として、それがみえる。「……上衣の等価形態は……上衣に物的に附属するようにみえるのである⁽³⁴⁾」。「この間違った仮象⁽³⁴⁾」が固定されてくると貨幣の誕生となる。そうなるのも、価値形態において、具体

的労働が抽象的・人間的労働の実現形態となるからである。

(3)

いままでみてきたように、ブルジョアの商品世界においては、労働生産物はその社会の諸関係からして、自然的にはもっていない一つの社会的属性、つまり価値をもたされ、労働生産物の自然性は使用価値という規定をうけた。これが、商品であった。商品を使用価値としてみたとき、それは一つの抽象性としてあるから、具体性は捨象される。商品は労働生産物であるから、このとき当然にも労働も抽象的・人間的労働となり、具体的・種々なる労働は捨象される。つまり、抽象的・人間的労働という資本制生産制的な反省規定がなければ（資本主義的）商品は価値なるものとはなりえない。資本制生産制の社会では、抽象的・人間的労働があり、それによって価値が実体づけられ、また価値量も生じている。しかし、商品は種々なる労働の生産物である。このように商品は、根底から二者闘争的であり、矛盾的自己同一性である。価値と使用価値とである。すなわち、一つの商品が同時に価値であり、使用価値であることは出来ない。したがって、他の商品との関係でもってのみそれらを同時に表現出来る。こうして、価値形態Ⅱ交換価値で価値表現がなされる。このことの意味は、種々なる労働が抽象的・人間的労働の実現形態となる、ということであった。つまり、抽象的・人間的労働によって価値形態はささえられているのであった。しかし、種々なる労働は存在する。これが、資本主義的商品の世

界であった。

「商品は一見したところでは、自明な、誰でもわかる物らしくみえる。その分析の示すところでは、商品は形而上学的な煩瑣と神学的な気まぐれとに充ちた、極めて厄介な物である」。(35) 机Ⅱ使用価値は物としては、それは一つの感性的なものだ。「絶対に何も謎的なところはない」。(35) 「しかし、机が商品として出てくるや否や、それは感性的にして、同時に超感性的な物に転化する」。(35) 商品は、自己矛盾的同一性であり、物神である。だからそれは、ひとり歩きする。「机は営に、その脚で地上に直立するばかりでなく、他のすべての商品に対しては頭で逆立ちし、そしてその木材の頭から、机がひとりでに踊りだす場合よりも、はるかに奇妙な幻想を展開するのである」。(36) こうした商品の謎的性格、労働生産物が商品の形態をとるや否や生ずる労働生産物の謎的特性、商品の神秘性は、商品物神そのものの特性である。それは、人々をまどわす。だが、何を、どのようにして惑わすのか。

すでにのべたように、商品は感性的にして超感性的である。つまり、労働生産物が商品形態をとることによって商品となり、使用価値と価値なる属性をもつにいたった。しかし、それらは労働生産物の自然的属性ではない。それらは商品となることによって生じたものである。それらは、外形的には物と物との関係から生じているから、人々は使用価値、価値なるものを、物の自然的属性だと思う。これが、物神崇拜である。かくて、「自然的属性」なるものに疑問をもたないで

しまう。本質を問わないでしまう。商品に含まれている労働に定位していえば、こうである。使用価値としては商品は区々であるが、しかし価値としては諸商品は同一性であり、一つの抽象である。したがって、使用価値としては種々の労働の産物であるが、価値としては同一な労働、つまり抽象的・人間的労働の産物となる。しかし、このことが物と物とにつつまこまれて見えない。「もし、人々が彼らの諸生産物をば、これらの物が等一な種類の人間的な労働（抽象的・人間的労働）の単に物的な外皮として効果をもつかぎりにおいて、価値として相互に関連させるとすれば、このことのうちには、同時に逆に彼等の種々なる労働は、物的外皮の中では等一な種類の人間的な労働（抽象的・人間的労働）としてのみ効果をもつ……」。(37) 逆にいえば、こうである。「彼らが、彼らの種々なる労働を（抽象的）人間的な労働として相互に関連させるのは、彼らが、彼らの諸生産物を価値として相互に関連させることによってである」。(38) だから、現実には抽象的・人間的労働はみえない。物と物との関係だけが現前する。そこでは、抽象的・人間的労働は背後にあってみえない。すなわち、労働力商品は背後にあってみえない。この意味で「人間的な関係は物的な形態によって蔽われている」。(38) 価値は自己の背後を示さない。「価値なるものの額には、それが何んでもあるかは書かれていない」。(38) 人間的な関係は価値の背後にかくされている。

また、次のことも真実である。諸労働の抽象的・人間的労働への還

近代的二元論批判・序説（伊藤一美）

元によって、単純な平均的労働に換算された労働時間による価値量の規定がなされる。しかも、これは「労働の生産力」によって、常に「社会的に必要な労働時間」として示される。これによって、価値量が決まる。しかし、この価値量は価値形態においてのみ現われる。だから、「社会的に必要な労働時間」なるものは価値形態の背後にかくれて見えない。「労働時間による価値量の規定は、相対的な商品の現象的運動の背後に隠れた一つの秘密である」。ここでも、抽象的・人間的労働は、物的関係として現われ、物的におおわれている。価値形態は、商品と商品との関連だから、物と物との関係とされ、人と人との関係を物的におおいかくす。人と人との関係を物神同志の関係とする。「……価値形態に關していえば、この形態こそ、正さに私的労働者（？）たちの社会的関連を、またそれゆえに私的諸労働（？）の社会的規定性（有用な労働と抽象的・人間的労働）を公開する代りに物的におおひ隠す」。(39) これが、商品の神秘性、謎的性格である。「……商品の神秘性は、私的生産者（？）たちにとっては、彼らの私的諸労働（？）の社会的な規定性（有用な労働と抽象的・人間的労働）は、労働諸生産物の社会的な自然的（本質的）規定性 gesellschaftliche Naturbestimmtheiten として現われるということ、人と人との社会的な生産諸関係は、物の相互の・および物の人に対する社会的な諸関係として現われるということ——こうしたことから生じるのである」。(40) 人々は、こうした神秘性にまきこまれてしまいがちである。それは、物

神崇拜の立場でもあり、古典経済学の立場でもある。

だが、そうなりがちなのである。というのは、「生産者たち自身の社会的運動は、彼らに向つては、彼らがこれを制御する代りに、これの制御の下に彼等が立つところの、物の運動という形態をとる」⁽³⁹⁾からである。つまり、労働生産物が商品として価値、使用価値をおび、価値形態を展開するという自立性⁽³⁹⁾物神性を示すからである。というのも、労働が抽象的、人間的労働となつているからである。また、諸労働生産物を価値として相互に関連させ、物質的なものを抽象物たる価値に還元すること、そして、そうすることで種々なる労働が抽象的・人間的労働に等置されること、「彼等はこのことを意識してはいないが、しかし彼等は物質的な物を抽象物たる価値に還元することによつて、このことを行う。それは即ち、彼らの物質的生産の特殊な仕方、およびかかる生産によつて彼らがひき入れられるところの諸関係から必然的に生れ出るところの、彼らの脳髓の自然生的な、従つてまた無意識的・本能的な活動である」⁽³⁸⁾からでもある。こうして、物神性論の根源は一つになる。すなわち、物神崇拜に人々をしてなさしめがちなのが、「物質的生産の特殊な仕方」⁽³⁸⁾であれば、物神の根源も抽象的・人間的労働にあったのだから、これ(物神)も当然「物質的生産の特殊な仕方、およびかかる生産によつて彼らがひき入れられるところの諸関係」⁽³⁹⁾に起源をもつからである。

ところで、マルクスは物神性論の根拠を「私的諸労働」においてい

るようにみえる。しかし、この「私的諸労働」とは、種々なる労働という意味のように思う。マルクスは私的諸労働を商品にアナロジーして説明している。「これらの私的労働がどれも、その自然的形態のままで、抽象的すなわち人間的な労働という、かかる特殊に社会的な形態を有たぬのは、恰も商品が、その自然的形態のままで、単なる労働膠結体、あるいは価値という社会的な形態を有たぬと同様である」⁽⁴¹⁾。商品は、自然形態においては使用対象であり、区々なるものである。それをつくる労働が私的労働なのである。だから、私的労働とは、種々なる具体的な労働のことである。そして、またいう。「かかる私的諸労働の社会的形態は……人間的な労働一般・人間的な労働力の支出としてのそれらの相互の関連である」⁽⁴¹⁾。すなわち、私的諸労働の社会的形態とは、抽象的・人間的労働である。だからこうもいう、「……私的諸労働の社会的形態とは何であるかということとは……商品の分析によつて明らかにされたところである」⁽⁴¹⁾、と。さらに、こうもいう。「いかなる社会的な労働形態においても、異なる個々人の労働は矢張り人間的な労働として関連させられるが、しかしここでは、この関連そのものが諸労働の特殊的に社会的形態として効果をもつのである」⁽⁴¹⁾。ここでは、「異なる個々人の労働」といっているが、これは私的労働のことであり、それが「特殊に社会的形態」をとる。だから、私的労働とは社会関係のなかで、抽象的、人間的労働ともなるものである。もっといえば、それは、具体的に私的個人としてのみ存在

している人間の労働で、労働が単にパンのためにだけ、となっていることであろう。したがって、私的労働とは商品化されて労働力となった生命活動による労働である。具体的には、それは賃労働であろう。

マルクスの叙述の根底には、常に抽象的・人間的労働がある。それは、労働力商品として存在する。したがって、のことは資本制諸関係、基軸としての資本―賃労働関係の存在につきあたる。その意味で、「資本論」第一篇第一章は、単なる商品論でも、価値論でもなく、商品―人間論・労働論、あるいは疎外論でもある。物神性論、いわゆる物象化論の始元は、マルクスにおいては、資本―賃労働関係にある。

4

これまでの論究では、近代的二元論も、現在のには資本制生産諸関係から把握せられなければならない、ということになる。それが、いわゆる「物象化論」についての検討から得た、一つの結果であるように思う。そのような立場から、以下のスケッチを試みることにする。

(1)

「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の必然的な、彼らの意志から独立した諸関係を、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係を受容する⁽¹⁾」。現代の人間種属が受容している生産諸関係は、資本制生産諸関係である。その基軸は資本―賃労働関係であり、他の諸関係は、この軸へと結びつけられ、こ

近代的二元論批判・序説（伊藤一美）

の関係によって意味づけられている。⁽²⁾この基軸関係は、論理的にも、歴史的にも、社会的富の偏在を前提としている。すなわち、それは歴史的には本源的蓄積過程を前提しており、現実的には、資本―賃労働関係によって再生産されている。したがって、この基軸関係の論理的始元は、社会的富の偏在である。ここから、富は富の目的物となつてしまった。生産は、資本のための生産となり、人間の生活の社会的生産とはなっていない。富も、生産も私的的目的物となった。これが、「個別化された個々人の立場をうみだす時代⁽²⁾」なのである。したがって、人間は私的諸個人としてだけ存在している。これが、『自由な個人』である。この自由平等な個人にとっては、すべてのものが私的的目的物となつてしまった。だから、個人とはいっても、私人にすぎない。

しかし、富の偏在によって「自由」の現われ方がちがう。その基軸は、一方には私的なものとなった生活のために生命活動を労働力として売る自由として現われ、労働が私的労働＝賃労働として現われた。そして、他方には労働力を購入し、剰余価値をうる自由となった。こうして、資本制生産諸関係の反省規定として、人々は具体的な私的諸個人として存在しており、基軸的には資本家等、賃労働者等として存在している。私人は同時に『もの』でもある。人間は諸関係そのものとして存在している。「人間の本質はなにも個々の個人に内在する抽象体ではない。その現実においては、それは社会的諸関係の総和である⁽³⁾」。人間の活動も「対象的活動」であり、対象、現実、感性が「感

性的な人間の活動」である。⁽⁴⁾

(2)

労働力商品の意味は何か。諸個人の生命活動は区別をとまなう。具體的なものでしかない。それを、「労働力」という無区別な一様なものとして売買することは、生命活動が物理的なパワーに還元されていることである。たかしに、これは一つの抽象であるが、それは概念作用ではなく、現実的過程としてなされている抽象である。「労働の無区別な単純性」ということは、いろいろの個人の労働が同等であるということであり、彼らの諸労働が同等なものとして相互に関係しあうことであって、しかもこの関係はすべての労働が等質な労働へ事実上還元されることによって生じる⁽⁵⁾。したがって、労働力・商品とは抽象的・人間的労働力のことである。これは、一つの物象概念である。人間が『もの』となっている。これによって、すべての労働は単純労働に還元され、継続時間による較量が可能となった。さらにこれが、「労働の生産力」によって規制せられ、社会的生産過程における抽象として「社会的に必要な労働時間」なるものが現われている。

これらのことは、一定の特殊な社会的生産過程を前提する。しかし、それは「生活の社会的生産」をなす労働過程ではなく、まさに生命活動を物化している資本の生産過程である。こゝに、「疎外された労働」論が展開されうる。

(3)

資本制生産諸関係が支配的な社会では、労働生産物は商品として生産され、『膨大な商品集束』のある社会である。労働生産物は価値なる物神性を附与され、もち、使用価値と価値からなる物神として存在している。それは自己矛盾的同一性である。それが、価値表現しようとするとき、価値形態⇨交換価値が展開される。そこには、商品⇨物神と商品⇨物神との関係があるだけで、それを生産している人間関係、つまり資本⇨賃労働関係がみえない。物と物との関係は、生産過程が物化されていること、すなわち資本も賃労働も物象でしかないこと、資本家も賃労働者も物象化物でしかないことをかくしている。人間や人間的なものが物象化され、物が物神化されている。物と物との関係は、このように人間が否定されていること、あるいは否定的現実を、それがあたかも自然的であるかのごとくにし、物的に被っている。

物神論、あるいは物神性論とは物神関係で被い隠されている、物象化や物神化をあばく論理である。だから、物神(性)と物象化・物神化という概念は区別されるべきであるし、他方、表裏関係としても位置づけられるべきである。物神(性)は、資本主義的な諸関係から生ずるが、その内在的原因は物象化、物神化である。種々なる労働の抽象的・人間的労働化など、労働過程の物象化・物神化から、物神(性)が生じている。だが、結果が原因を被い隠す。すなわち、疎外された存在が物神(性)をつくる。否定された存在が、相互に関係すること

によって、そこに第三のものが生じ、それが物的形象をとり、物神が生ずる。だから、物神は「媒介」から媒介物に対して生ずるのではない。関係から媒介物が生じ、ここに物神が誕生するのである。また関係から出発しないと、結局、いかなる関係か、という論究がぬけ落ちてしまう。したがって、いわゆる「物象化論」では「人と人との関係が物的に被われている」ということも把握出来ずにいるように思う。したがって、物象化や物化の概念は物神性論（物神論）のなかで位置づけらるべきだ。

近代社会は、商品、貨幣、資本といった物神の支配的な社会である。私的諸個人は、その存在様式からして、物神崇拜におちいる。そうした目は、貨幣や商品や資本へと収斂する。それは抽象、そして数と量への信仰でもある。こうして貨幣や商品や資本に拝跪し、貨幣や商品や資本になりきる人々もいる。しかし、それから本質的に遠い人々もいる。

(4)

現実的諸関係のなかで、人間は具体的な私的諸個人『もの』として存在している。逆に、彼らが諸関係を生成している。しかし、彼らは具体的私的諸個人であるから、自己の生活のみを見つめている。だが、そのようなありかたをしながら、相互に関係しあっている。だから彼らを結び合わせるものがあることになる。それは、私と私とを越えた

近代的二元論批判・序説（伊藤一美）

ものである。具体的私的諸個人が関係しうるのは、相互に他者の中に、第三のものをみるからである。それが一般的諸個人である。それは、具体的私的諸個人をこえた一般性、一般的人間である。こうして、具体的私的諸個人に一般的人間なる抽象物が附与されている。この一般的人間は、理性的人間であり、近代的自我・主体性であり、「公としての個人」であり、「一般意志」、「a priori な個」である。私的諸個人はこれに拝跪する。けれど抽象を崇拜しがちなように、資本制的に存在づけられているからである。これは、人間が現実的には否定されていることの現われである。だから、理性的人間なる抽象は事実を隠蔽する役割をもたされている。逆にいえば、人々は抽象的にしか「人間」でない、という現存在である。しかし、二規定をあづかっている。かくて、人々は具体的私的諸個人でもあり、理性的人間でもあるから、両者に自己分裂し、ゆれまどう。このことは、個人としても自己矛盾的でもあるし、それ故相互関係としても自己矛盾であるということである。すなわち、私的であるとともに、一般的であることは出来ない。しかも、現実的に私的にしかありやうがない。こうして、一般性＝理性的人間は抽象としての共同性において結び合う。これが「幻想としての共同体」である。また、自然権をもった抽象としての諸個人の世界である。人々は、この共同幻想に拝跪する。しかし、現実的＝私的立場との自己矛盾を揚棄出来ない。こうして、一方では私と公との社会哲学が展開され、そして他方、この社会哲学を、そうし

たイデオロギーを軸とした力関係を媒介にして、「幻想としての共同体」が実体化されている。シンボルの存在。この背後で、支配的階級が、権力を握っているのだが、それが幻想性のヴェールによって隠されている。換言すれば、私と公との隔絶をうめるための一つの論理が、権利の思想、社会契約論からなる近代政治思想である。それは、人間を抽象的に、自由・平等な人間＝人格として、それがあたかも現実の人間であるかのように描いている。この上に、近代国家は闘争的に構築された。だから、国家はイデオロギー的、闘争的媒介を経て確立された「共同体」であり、実体化された「共同幻想」である。国家は物神である。ここから、国家への物神崇拜が生じる。こうしたなかで、国家は自己展開する。そして、闘争論的に「管理社会」の主役へと肥大してきた。役割の体现者が現われる。すなわち、物神崇拜におちいつている目は、あらゆる組織における『金モール』、『地位』へと収斂する。そして「地位」としての自己意識⁽⁷⁾が生じる。

5

近代社会は、その土台においても、上部構造においても物神化されている社会である。私的諸個人⁽⁵⁾『もの』は、貨幣物神、商品物神、資本物神、国家物神⁽⁶⁾リバイアサンに拝跪している。また、私的諸個人の相互連関は、抽象としての『人間』なる概念をつくり出し、それが私的諸個人に附与されている。人々は、これにも拝跪している。「か

かる商品生産者たちの社会にとっては、抽象的人間を礼拝するキリスト教が、ことにそのブルジョア的發展たる新教、理神論等々としてのキリスト教が、最もふさわしい宗教形態である⁽⁸⁾」。社会の存在構造からして、無意識のうちに「抽象的（理性的）人間」に拝跪していく。この抽象的人間が「主観性」、あるいは「主体性」となる。ここから、誤った規定が出てくる。すなわち、人間は「（個的）主体」でもあり私的個人でもある、そうした自己矛盾的な存在となり、そして私利己主義と「主体性」とにゆれまどう。

しかも、人間が「主体性」と規定されたとき、外在的なものはすべて客体・客観となる。このとき、「主体性」の讃歌が一方ではうたいあげられるが、客体は自立したもの⁽⁹⁾必然とみなされる。しかし同時に、それは「死したもの」、あるいは支配の対象、数量的対象として取り扱われる。ここから、主体―客体なる二元論が再生産される。

本稿の論脈から次のようなことがいえる。二元論現象は、二つの「自明性」から論理づけるよりも、近代人の自己矛盾から論理づけるほうが、より根源的である。

6

いままで、近代的二元論の生成構造を究明してきた。それによって、二元論を二元論だといって批判することは出来る。だが、それたちには近代的二元論の超克ではない。それは、本稿での論究のう

えになされていかなければならない。しかし、本稿の論究から次のことが明らかとなった。その一つは、近代的二元論の根拠が、私的諸個人の相互存在であるから、それを越えた新たな人間像を追求することである。しかし、人間とは社会的諸関係の総体であり、「土台」——人間であり、また社会的諸関係の反省規定であるのだから、この社会的諸関係のあり方をも同時に問われねばならない。そして、第二には、それらのことを近代や近代学問の内在的批判を媒介としてなすことである。

(未完)

(本稿は幾徳工業大学学術研究費による共同研究の一環である)

注

引用文中の「」は論者の挿入語句を示す。

- (1) 幾徳工大研究報告A第2号52年、所収。

1

- (2) 筑摩書房刊、本稿では第1部にのみ論及している。以下Mと省略。

- (3) M 6 頁

- (4) M 8 頁

- (5) M 10 頁

- (6) M 13 頁

- (7) M 14 頁

- (8) M 16 頁

- (9) M 20 頁

- (10) M 21 頁

- (11) M 25 頁

- (12) M 27 頁

近代的二元論批判・序説 (伊藤一美)

- (13) M 30 頁
(14) M 41 頁
(15) M 43 頁
(16) M 61 頁

- (1) 特に「初版」に従った。青木書店一九五九年刊 Marx: Das Kapital, 1867. 引用文は、岩波文庫、長谷部訳「資本論初版鈔」によった。訳語は多少変更した。以下Kと省略。

- (2) K 19 頁 S 1

- (3) K 21 頁 S 2

- (4) K 22 頁 S 2

- (5) K 25 頁 S 3

- (6) 「資本論」長谷部訳・青木書店刊、以下K(I)と省略、

- K(I) S 41、引用文頁数は訳書記入の原書頁数である。

- (7) K 27 頁 S 4

- (8) K(I) S 80

- (9) K 28 頁 S 4

- (10) K(I) S 42

- (11) K(I) S 43

- (12) K 29 頁 S 4

- (13) K 31 頁 S 6

- (14) マルクス「経済学批判」、引用文は大月書店刊、マルクス・エンゲルス選集補巻3による。

- Marx-Engels Werke, Bdt.3. Zur Kritik der Politischen Ökonomie Ⅱ, Zと省略。

- (15) 本文は「交換価値」となっているが、文脈から「価値」が正しい。

- (16) Z 12 頁 S 18

- (17) K 40 頁 S 10

- (18) K 143 頁 S 767

- (19) K 46 頁 S 13

- (20) K(I) S 52

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	(41)	(40)	(39)	(38)	(37)	(36)	(35)	(34)	(33)	(32)	(31)	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)
K	M	K	Z		Marx.	Z	Z	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K	K
101	60	(I)	14		Thesen über Feuerbach	257	3	83	100	96	95	94	90	90	65	65	64	61	61	60	59	(I)	58	55	53	53	48	(I)
頁	頁	S	頁		ibid.	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	S	頁	頁	頁	頁	頁	S
S		56	S		1	616	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	64	S	S	S	S	S	53
40			19		6	8		32	39	39	38	38	36	35	23	22	22	21	20	20	19		19	17	17	16	13	

幾徳工業大学研究報告 A-4